

インド仏教について

1. 古代インド社会 ～仏教以前～
2. 仏教の誕生 ～ブッダの悟りと説法～
3. 仏教教団の発展と分裂
4. 部派仏教
5. 大乘仏教の成立
6. 大乘仏教とは？
7. 大乘仏教の展開
8. インドにおける仏教の消滅

2016. 5. 17

齊藤 征雄

○ 仏教が生まれた背景 ～BC500年頃、十六国時代のガンジス川流域～

- ・鉄器使用による農業生産力の増大⇒部族社会から国家へ／十六国時代
城壁をもつ都城(古代都市＝ナガラ)の出現／ポリス的(市場を中心に賑わう)

マガダ国 : ラージャグリハ(王舎城)
コーサラ国 : シュラーヴァスティ(舎衛城)

- ・王侯、貴族の台頭
BC5世紀末、マガダ国が全インド統一(ナンダ王朝)⇒BC3世紀マウリア朝アショーカ王の時全盛
- ・大商人(長者)の出現
経済の発展／ナガラを拠点にして交易、巨万の富／ギルドを傘下

《新しい思想家たちの出現》

バラモンの腐敗／ナガラを中心に市民社会が形成される＝自由な気風 を背景にして
多くの出家者(沙門)が生まれる (cf 四住期の風習)

⇒彼らは、新しい思想家たちでもあった (支持者は、王侯貴族、大商人)

- <自由と平等の思想> ・ヴェーダの権威を認めない
 ・宗教的祭祀の意味を認めない
 ・バラモンを筆頭とする社会組織(カースト)を認めない

などの反バラモンの立場に立って

- ・この世は無常か常住か
- ・霊魂はあるか、ないか、死後の存在はどうか を議論した。

ブッダもその中の一人／他に仏典に登場する「六師外道」と呼ばれる思想家たち

○ ブッダ (BC466～386 :宇井伯寿説 南伝説 :BC566～486)

- ・ネパール／タライ地方／ルンビニーで生まれる。カピラヴァストウを本拠とするシャカ族の王の子
- ・宮殿で贅沢な生活／学問、技芸に非凡の才能／深く思い悩む性格／生まれてすぐ母親死／妻子あり
- ・29歳で王城 を出て出家(四門出遊)・・・人間の生病老死の苦悩を如何に克服するか
- ・遊行して修行／悪魔の誘惑と戦いながら苦行6年／やせ衰えて死の寸前／苦行は真実の道ではないと知り、苦行を捨てる／少女スジャータのささげる牛乳を飲んで回復
- ・ブッダガヤーの菩提樹の下で悟りを開く(35歳)
- ・各地を遍歴して布教
- ・80歳 王舎城の霊鷲山を出て故郷ルンビニーへ最後の旅、途中クシナガラで没

2. 仏教の誕生 ～ブッダの悟りと説法～

【悟り】

- 諸行無常
 - ・この世に存在するすべてのものは、変化するもの。恒常不変のものはない。
 - ・人間もいずれは死ぬ運命にある ⇒ 諸行無常
(生まれては死ぬるなりけりおしなべて 釈迦も達磨も猫も杓子も 一休宗純)
 - ・にも拘らず、不老不死などありえないことを願うのが人間、そのため「苦」が生ずる(一切皆苦)

- 諸法無我
 - ・諸行無常の延長線上にある(自我も恒常不変ではない／死後の靈魂はない)
(ウパニシャッド哲学では、アートマン＝自我は死んだあとまでも靈魂となって生き続ける実体のある存在という。⇒仏教はそれに対するアンチテーゼ)
 - ・ただ、自己の存在をまったく否定しているのではない。
自我を恒常不変の固定的な実体としてとらえることを否定しているといわれる。
 - ・ブッダは、人間を構成する五蘊(色受想行識)のいずれにも自我は見当たらない、という方法で無我を説明した(五蘊無我説)
 - ・悟って成仏することは、自分が変わる事(自我が固定的で不変ならば、変化できない)

- 縁起
 - ・世の中のあらゆるものは、因という直接の原因と、縁という間接的な条件が関係しあって生起する。
(何の原因も条件もなく、単独で生起して存在するものはない)
 - ・縁起の法(真理であって、ブッダが創ったものではない)
これがあるとき かれがある これがないとき かれがない
これが生ずるとき かれが生ずる これが滅するとき かれが滅する(二つの葦束の関係)

 - ・縁起こそが、ブッダの悟りの核心……人間存在のありようを、縁起という形で把握できた
諸行無常、諸法無我は、縁起から導き出される
原因を無くす(滅す)ことによって、苦を解消できる

【説法】

○ 梵天勸請

- ・ブッダは当初、自ら悟った内容を人びとに説法することを躊躇した
(欲望にまみれた衆生には、深くかつ微妙な真理は理解できないだろう)
 - ・天界にいた梵天がこれを見て、衆生が永遠に救われなれないと思い、ブッダの前に現れて人びとに教えを説くように三度にわたって勧める。
ブッダはこれに応じ、説法を決意した。この説話を「梵天勸請」という。
- ＜梵天勸請の意味＞
- ・ブッダのとまどいと決意(あまりの悟りの深さは、言葉を超えている)
 - ・梵天を登場させることで、バラモン教を否定し仏教の真理を印象づける

○ 初転法輪

- ・新興宗教としての仏教のスタート
- ・場所：ベナレス郊外サルナート(鹿野苑)／バラモン教の聖地
- ・相手：かつて苦行時代を共にした5人の出家者(ブッダを軽蔑した 新しい思想家たち)
- ・内容：苦を滅する実践論＝「四諦の教え」「八正道」
(無常、無我、縁起などの哲学思想には触れない・・・実践には役に立たない、不毛)

○ 四諦の教えと八正道

【四諦】 四聖諦・・・四つの聖なる命題。今日まで続く仏教実践の体系。

苦諦	人間の生存についての真理	人間の生存は苦を本性としており一切皆苦である
集諦	苦の原因についての真理	苦の原因は渴愛。欲望に対する渴愛が煩惱である
滅諦	苦の滅についての真理	渴愛を滅したときに、絶対の平安すなわち涅槃が得られる
道諦	苦を滅する方法についての真理	正しい八つの道を実践することにより苦を滅することができる

【八正道】

1. 正しい物の見方(正見)
 2. 正しい思惟(正思)
 3. 正しい言葉(正語)
 4. 正しい行為(正業)
 5. 正しい生活(正命)
 6. 正しい努力(正精進)
 7. 正しい注意力(正念)
 8. 正しい精神統一(正定)
- 《苦行、易行の二つの極端の中道をいく》
《三学：戒・定・慧》

【一切皆苦】 四苦(生病老死)、八苦(怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦、五取蘊苦)

【渴 愛】 欲望を求める激しい心のはたらき (渴するものが水を求める心)
渴愛を滅するとは、欲望を欲する心のいとなみを滅することで欲望そのものを滅することではない

cf 貪欲

貪：炎のように燃える激しい心のいとなみ

3. 仏教教団の発展と分裂

- ブッダ生存中の教団
 - ・出家の弟子とともに各地を遍歴して教えを説く。托鉢(乞食)
雨期は都市郊外の精舎に滞在 exマガダ国 / ラージャグリハ / 竹林精舎
コーサラ国 / シュラーヴァスティ / 祇園精舎
(長者スダッタの寄進)
 - ・十大弟子 と ブッダの人徳によって秩序が維持された
- ブッダ滅後の教団
 - ・ブッダ生存中、教えは口伝 ⇒ 死後、経蔵(阿含経、ニカーヤ)、律蔵が成立 (原始仏教)
 - ・経蔵、律蔵をベースに、出家修行集団としての教団が成立
(ブッダの死後、出家者は次第に遊行をしなくなり僧伽にとどまるようになった)

【原始教団＝僧伽(さんが) の組織】

男女の出家者が、それぞれ別々に僧伽を形成

一定の規律の下に修行、平等の共同生活

僧伽の拡大が、すなわち仏教の拡大を意味する

≪四大霊場≫

- 教団の発展
 - ・仏教は四大霊場を中心とする中インドから西、南へ伝播
 - ・BC3世紀 マガダ国マウリア朝アショーカ王 深く仏教に帰依

- ・ルンビニー(生誕)
- ・クシナガラ(入滅)
- ・ブッダガヤー(悟り)
- ・サールナート(初説法)

仏教に基づく政治理想⇒石柱碑文、仏塔建立

僧伽を援助

⇒ 仏教は急速にインド全域に広まる

- 教団の分裂
 - ・仏滅100年 上座部と大衆部に分裂(根本分裂)
 - ・仏滅100～400年 上記2派が細分化 (枝末分裂)

(教団の急速な拡大が多様化を生む(律の解釈の違い、教義の違い))

- 20の部派
 - ・僧伽は王侯貴族、大商人の経済的保護で豊か
 - 各部派教団は、僧伽を支配下において安定した生活のもと仏典研究に励んだ(アビダルマ) …有力部派 スリランカの上座部
カシミールを中心とする説一切有部

4. 部派仏教

○ アビダルマ

- ・経蔵(アーガマ經典)の研究。これによって、断片的だった仏教思想が体系化された七論(上座部)、発智論(説一切有部)

○ 説一切有部

(BC2世紀頃成立)

<宇宙観、と輪廻転生・業> ……古代インドの思想を仏教がアレンジして取り入れた

- ・宇宙の成り立ちのはじめ……創造神ではなく「サットヴァ・カルマン」(自然界の業の力)の微風
- ・人間は、スメール山(須弥山)を中心とする世界(小世界)に住む(小世界は形成、持続、破戒、空無
小世界が千個集まって 小千世界 十二億年の周期で繰り返す)
小千世界が千個集めて 中千世界
中千世界が千個集まって 三千大千世界 (小世界が10億個)
- ・三界(無色界、色界、欲界)の中で、六道輪廻する (天上、人間、畜生、餓鬼、阿修羅、地獄)
- ・輪廻は、業によってもたらされる。善い行為、悪い行為の如何によって、生存の種々相が決まる
因果応報……必ず報いがある 自業自得……必ず自分に降りかかる

<部派仏教の目指すところ>

- ・輪廻的世界には、必ず煩惱が伴う。修行によって煩惱を断じ、悟りの領域へ向かう

<存在論>

- ・世界を構成するもの(五蘊、十二処、十八界) ⇒ 五位七十五法による範疇(究極の構成要素)
- ・世界の一切は、究極の構成要素(ダルマ)の因果関係で生起する
⇒ 現象世界は、刹那滅(一瞬に生起し、一瞬に滅す)の積み重ね (諸行無常、諸法無我)
- ・一方、究極の構成要素は、それ自体不変の実体を持って実在する
⇒ 過去、現在、未来の三世にわたって実有(三世実有、法体恒有)

<修業の階梯>

- 準備的段階 不浄観 (死屍が腐敗して白骨になる様を観想して性的欲望を制する)
- 持息念 (呼吸法を修練して、高い精神的境地に達する)
- 四念住 (身体の不浄、感受の苦、心は無常、事物は無我の四つを観念する修行)
- 四善根 (四諦を繰り返し観ずる修行)
- 智慧の修行 見道 (八十八の煩惱を断つ)
- 修道 (十の煩惱を断つ) …… 在家はこの途中までしか行けない
- 無学道 (すべての煩惱を断ち切った段階) …… 出家の最高=阿羅漢(仏の一つ前)
衆生救済の慈悲心はない

5. 大乘仏教の成立

○ 仏教の新たな流れ

- < 仏塔信仰 >
- ・ブツダの死後遺骨を八分骨・・・仏塔建立・・・その後聖地に仏塔
 - アショーカ王が各地に仏塔建立
 - ・出家者は仏塔に関与することは禁じられていた(ブツダの遺言)
 - 仏塔は在家信者が管理 → 在家信者の仏教活動の場 (部派は在家信者に冷淡)

< 仏伝文学と法師 >

- ・偉大なブツダは、過去世にどのような修行をしたかに関心
- 本生譚(ジャータカ)が作られ → 仏伝文学へ
- ・ブツダの修行時代を 菩薩という
- ・法師(バーナカ)と呼ばれる説教師の存在・・・仏塔でジャータカや仏伝文学を語る

○ 大乘仏教起源論

< 大衆部起源説 > 部派仏教の中の大衆部が核となって大乘仏教が成立した

< 在家・仏塔起源説 > 仏塔を拠点とする在家信者グループを核として大乘仏教が成立
・・・この説が今日まで大きな影響力を持った

< 起源を部派仏教内部に求める傾向 >

大乘仏教は4世紀頃まで教団としての実体がなかった

部派仏教の中で、異なる教理のグループが共存することが可能だった

⇒ ことから、部派仏教の中で大乘仏教グループが共存して次第に大きくなった

○ 大乘仏教の成立

- ・紀元前1世紀頃
- ・部派仏教批判として起こった仏教革新運動 (部派を小乗と蔑み、自らを大乘という)
- ・運動の主体: 部派仏教の出家者の一部 / 市井の説教者(法師) / 在家の一般信者
- ・仏塔信仰や仏伝文学が何らかの形で影響している
- ・初期の段階では明確な形での教団組織が確立していなかった

6. 大乘仏教とは？

大 乘 仏 教	小 乘 仏 教
○新しい仏教革新運動	○伝統的、保守的仏教(部派仏教)
○新たな經典を創作 (戯曲的構成 ← 仏伝文学の影響) (「如是我聞」 cf 大乘非仏説)	○歴史的人物としてのブツダの教えに忠実 (アーガマ=阿含經、ニカーヤ)
<p>○慈悲にもとづく利他行</p> <ul style="list-style-type: none"> ・菩薩…仏になることを目指す修行者 &すべての衆生を救済することを願う。六波羅蜜。 ・出家…菩提心を発すれば是れ即ち出家 (在家と出家を区別しない) ・諸仏・諸菩薩信仰(過去七仏→三世十方に無数の諸仏) 菩薩…悟りの段階にありながら衆生救済を決意 諸仏・諸菩薩に帰依して救われたい(現世利益) 合わせて ・仏像、菩薩像信仰 ・呪句(陀羅尼)の活用 	<p>○他人救済に無関心 (僧院で静かに瞑想、教理研究)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・声聞…僧院に入って修行、阿羅漢を目指す 独覚…森林などで孤独に修行、独自に悟る。 縁覚ともいう。 ・出家主義 ・仏はブツダのみ <p>・呪句は嚴禁</p>
<p>○空を知る智慧 (般若波羅蜜多)</p> <p>迷いの世界(世俗的世界)も、悟りの世界(宗教的聖なる世界)すべてが 空</p> <p>→ 迷いの世界も悟りの世界も本質は同じ 両者は区別できない(無執着／無区別／不二)</p> <p>→ 日常生活の中に涅槃がある (在家のまま悟りへ「在家主義」)</p> <p>・我空法空 (自我を否定し、かつ世界全体に何ら実体がない) →救う者も空、救われる者も空、到達する世界も空 すべてが空において一体となる 自他の対立感がなくなり、慈悲が実現する</p>	<p>○実有の思想 (三世実有、法体恒有)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世俗的なものを捨て去り、世俗世界から抜け出して悟りの世界へ入る ・悟りは出家を前提、目指すは阿羅漢 (いくら修行してもブツダにはなれない) ・我空法有(自我、我執を断つ)

初期大乘經典

<p>大般若波羅蜜多經(600卷) 小品般若經(八千頌般若經) 大品般若經(二万五千頌般若經) 十万頌般若經 金剛般若經</p> <p>般若心經</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 空を説く・あらゆる事物は空 (空とは固定的実体を有しないこと) ・説一切有部への対立軸 ○ 迷いの世界も悟りの世界もすべてが空 両者に区別はなく一体(不二) ・日常生活の中に涅槃がある (在家主義) ○ 「五蘊皆空」を知ること 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 菩薩・仏になろうとする修行者 &衆生の救済を願う者 ・衆生とともにこの世の苦を共にす ○ 般若波羅蜜多・智慧の完成 (空の智慧) ・六波羅蜜・布施、持戒、忍辱、 精進、禪定、智慧 ○ 瞑想による直観 ・最高の真実は言葉ではない
<p>維摩經(維摩詰所説經)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 空観をベースに不二の法門を説く ○ 在家主義(現世から離脱する出家を否定) ・主人公維摩詰・出家者を論破 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 維摩の一黙 ・究極の空の立場・不二の法門は言葉では表現できない
<p>法華經(妙法蓮華經) (迹門)</p> <p>(本門)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 三乗方便、一乗眞実を説く ・声聞乗、縁覚乗、菩薩乗 →仏乘に帰着(宇宙の眞理) ○ 久遠の本仏思想 ・ブッダは久遠の昔に悟り、不滅 ○ 諸經の王といわれる 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 三車火宅のたとえ (一乗による衆生救済) ○ 長者窮子のたとえ (慈悲は深く愚かな凡夫も救う) ○ 菩薩行の重要性 ・ブッダ自身が長い間たえざる修行
<p>華嚴經(大方広仏華嚴經)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 蘆舎那仏の悟りの世界を示すことにより衆生をそこへ導く ・蓮華蔵世界・華嚴 ○ 「一即一切、一切一即」の宇宙観 ・広大無辺の世界は、仏の世界でありかつ凡夫の世界でもある ・仏の智慧と慈悲 ○ 三界唯心の思想 ・迷いの世界も仏の世界も心次第 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 十地の実践 ・菩薩が悟りに到達するまでにたどる十段階の過程 ・六段階で空を悟り、七段階以降慈悲の智慧に入る ○ 善財童子の物語 ・53人の善知識(先生)に仏道の助言を聞き悟りに達する
<p>浄土三部經 無量寿經 觀無量寿經 阿弥陀經</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現世は穢土彼岸に浄土ありと説く (極楽浄土) ○ 法蔵菩薩の四十八願 ・遠い過去に世自在王仏に帰依して出家、四十八願を成就して成仏阿弥陀仏(無量寿仏)となった。 ・称名念仏による浄土往生を保証 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 称名念仏(南無阿弥陀仏) ・南無・帰依(帰命)する意味

7. 大乘仏教の展開

【 龍樹に始まる中観派の思想 】……「中論」

○ 縁起＝無自性＝空

・すべてのものは、縁起せる故に無自性、無自性故に空である。

・すべてのものは、不生・不滅

縁起せるものは、存在の自性がないから、自性によって生起するということはありません。

故に、不生である。生がなければ滅もない。

・八不……縁起によって、不生・不滅、不常・不断、不一・不異、不来・不去が説明される。

○ 空は、非有非無の中道

・中道は初期仏教以来の教理(苦行、易行の中道)

・その後、説一切有部 …… 法有の論理

大乘仏教の一部 …… 空にとらわれて虚無主義が現れる

⇒ 非有非無の中道を強調

< 縁起＝空＝中道 >

・空と無は、異なる概念、空は、有と無の対立を超えている (空の対立概念は「不空」)

< 有 ← 空 → 無 >

空 : 本体のない存在、有 : 本体が有る存在、無 : 存在するものがなにもない

○ 空に成りきった世界は、諸法実相

・言葉では表現できない (言葉は、仮設・戯論)

・しかし、現実に処する際には二つの真理(二諦)がある。

世俗諦 : 世間一般の理解としての真理……言葉の世界は虚構 (対応する本体はない)

ただし、効用はもつ

勝義諦 : 最高の真実としての真理 ……空を知る＝最高の真実

最高の真実(空)は直観においてあらわになる

(相手により、ギリギリまで言葉にたよらざるをえないが、最後は言葉を捨てる)

・人生も世界も、夢・幻 (実体として存在するものではなく、全く存在しないものでもない)

・迷いの世界と悟りの世界は「不二」(迷悟一如)

⇒ 分けられた二つの世界が、空ということ通じて一つになる。(対立概念はなくなる)

【 弥勒、無着、世親に始まる瑜伽行 唯識派の思想 】

【 如来蔵思想 】

【 密教の成立 】

8. インドにおける仏教の消滅

○ グプタ朝（320頃成立 ～500頃分裂衰退）・380～415頃 チャンドラ・グプタⅡ世のとき全盛

・ヒンズー教を国教とする

<ヒンズー教>

民間の土俗信仰がバラモン教と融合した多神教
(ヴィシュヌ神・シヴァ神) 一部仏教教義も取り込む

・カースト階位を重視

・マヌ法典(人びとの宗教的義務や日常生活の規範)

○ 仏教の状況

・部派仏教と大乘仏教が共存(社会的勢力としては部派が優位)

・仏教教義の研究が盛ん(ナーランダール寺院)

・仏教美術頂点(アジャンタ石窟寺院ほか、グプタ様式)

・しかし、全体的にはヒンズー教に押され衰退傾向をたどる

<グプタ朝以後小国分立抗争 → 10世紀以降、イスラム勢力のインド侵入>

・1203 ヴィクラマシー寺院がイスラムに焼き討ちされたのを契機に仏教急速に衰微・消滅

○ 仏教が消滅した理由

・もともと合理主義的、哲学的宗教 → 一般大衆に受け入れられにくい

呪術、魔法のようなものや祭祀を排斥／カースト制度に反対、平等主義

⇒ 強固な民衆信徒の教団組織が形成されなかった

僧院中心主義／家庭内に宗教的儀礼が定着しなかった(土着的核づくりがなかった)

・ローマの衰微に伴う西方貿易の衰退によってスポンサーを失った(豪商、手工業者)

・密教の発生、一部タントラの信仰(男女の性的結合で神と一体化)／猥小な宗教へ墮落